

# 方丈庵・〈き〉がわりの假具で自在の間を 楽しむ

2010年9月25日 入間市博物館・アリット／東野高等学校

昨今、長持ちのする住宅が奨励されています。確かに環境資源の観点からも、文化の観点からも、器としての住宅は長寿命であるべきかもしれません。しかし一度しかない人生、住まう空間はそのときに応じて短ければ短い寿命であった方が望ましいと思う「キリギリス思考」もまた人情でしょう。そのような理由から、かつて明治大学の内田祥哉研究室で開発された「Vブレイム」という可動間仕切のシステムがあります。アルミの架構に自在の内装を施して、「気分」「季節」「時期」のそれぞれの〈き〉に応じて、住まい手みずから組み立てて解体し、また組み立てられる「臨機応楽」が特徴です。このシステムは「〈き〉がわりの假具」(以下「假具」)と呼ばれます。昨年度(2009年)の〈SMFア

白さ、「方丈庵」は素材の精緻なテクスチャー、それぞれの特徴は異なるかもしれませんが、セルフビルドで日常を囲い、住まいの中に刹那的な間を生み出すという目的は同じです。そこで、入間市博物館で開催される「秋のお茶まつり」で二つの囲いを組み合わせ、ダンスや茶道などの現代の生活文化との競演で「自在の間」を楽しもうということになりました。

博物館に隣接する東野高等学校では「建築ツアー」、方丈庵では「囲いで踊る」、「煎茶Hako手前」、「抹茶Air点前」(9月26日)と多彩なプログラムがくりひろげられました。また、講座室の「囲いを語る」では内田祥哉さんが、あらかじめ映像に収められた安井さんとの対談を見ながら、「安井さんの

園に架設した「〈き〉がわりの假具」と同様に、今年度も建築学科の学生さんたちのワークショップという形で入間市博物館の館内に「方丈庵」の設営をおこないました。工事は、数多くの社寺建築を手掛ける西澤工務店の藤野利雄さんが主導してくださいました。

「〈き〉がわりの假具」と「方丈庵」は、ともに木とアルミでできていて、木の部分には本格的な伝統的建築構法が用いられています。このワークショップは、本物の建築技術を間近で体験できる場でもありました。昨今では建築関係者でさえ、そういった技術に触れる機会はほとんどなく、学生さんにとってもひじょうに貴重な体験でした。藤野さんが木材の継手・仕口の組み方を実演すると、学生さん



に、楽しみにこの日を迎えました。そして、9月25日のダンスパフォーマンス当日、初めて目にした「方丈庵」の、重厚なのに透けるような美しさのある空間に息を呑み、心の底から喜びが湧き上がりました。

私たちダンスユニット「転々」の用意した各作品は、「方丈庵」で踊ることでテーマがより凝縮されて見えてきたように思います。私の勝手な感想ですが、たいへん濃い時間を作らせていただけました。もし、また機会があれば何度でも、何度でも、この美しい「方丈庵」で踊らせていただきたいと切に願います。

藤井香 (SMF運営委員)



からは驚嘆の声が上がりました。間近で体験すると、そこには単に技術といった枠組みを超えた美しさがあります。建築は、実際に目に見える装飾や材料の美しさに目がいきがちですが、そうした「ものづくり」の過程にこそアートとしての側面があることにあらためて気付かされたワークショップでした。

佐野哲史 (SMF協力委員)

## 囲いで踊る 舞踊:ダンスユニット「転々」

「美しい」  
使いこなせる語彙の少ない私たちにとって、「方丈庵・〈き〉がわりの假具」を初めて目にした時の印象は、このひと言につきます。

アリット館内に設置される「方丈庵」で踊らせていただけることに決まってから、「方丈庵」なるものを想像し、この場で活躍する舞踊作品の上演や新作の創作を依頼し、楽しむ

=安心という意識は固定化して、新しい企画の提案やさらにリニューアルしていこうとする意識がなかなか醸成されてこない状況になっています。

これら二つの季節の茶会は、茶道・煎茶道を基軸として華道、音曲などを加えておこなわれてきたため、催事はお茶の会主、その関係者、茶会への参加者(限定された人数)を中心に開催され、博物館への一般来館者は観覧者という構成となってしまいます。また、厳然とした伝統的作法に基づいて茶会の催事が進められるため、新たな企画や試みですらなかなか、その中に入り込む余地がない状況となっています。

年々、このような状況が顕著になってきたことから、参加者人数の固定化に伴い費用対効果の面から見ても、もっと大勢の人が参加できる内容にできないか、お茶会に終始せず、お茶の素材をもっと活かした多様な企画が実施できないかなどの課題が投げかけられ、22年度からは「月見の茶会」に



当館は総合博物館としての運営を中軸としながらも、地場産業の狭山茶をはじめ、茶文化などのお茶全般を扱う博物館としても活動をしています。そのため開館の平成6年度からは、茶関係のイベントや特別展なども数多く開催してきました。特に平成22年度にリニューアルした「秋のお茶まつり」につながる季節の茶会は、春は新茶・新緑の時期にあわせて「花の茶会」、秋は仲秋の観月にあわせて「月見の茶会」を14年間実施してきました。このように長年おこなわれてきた恒例催事であるため、次第に季節の風物詩となって定着してきています。しかし、定着

「花の茶会」を合体して一つのイベントとし、しかも従前からの催事内容を踏まえつつも新たな内容を付け加えて二日間実施することとしました。

二日間におよぶ今年の「秋のお茶まつり」のメインとなったのは〈方丈庵・〈き〉がわりの假具で自在の間を

楽しむ)の斬新かつ革新的なイベント実施でした。この建物「方丈庵」については、立て込み段階からさまざまな関心が寄せられました。まず、どんな建物かを想像できない建物の名称、木材とアルミの奇異な素材、茶室のようで茶室でないような建物など……。 「秋のお茶まつり」と銘打っているからには大概の人たちは、この建物を茶室と思い、また従前からのお茶の催事がおこなわれるだろうと思われたことでしょう。イベント本番では、冒頭のダンスユニット「転々」の舞踊にはじまり、「煎茶Hako手前」、横笛の古楽器演奏、琴・尺八の曲とジョイントした「抹茶Air点

前」などが催され、驚きから感動に包まれたことは誰しも認めるところです。まさに、和と洋、伝統と革新、反発と融合、異質、自由などが「交差する風」がうまれ、またその風は相対しながら融合する「織りなす風」ともなって、この囲いの間を吹き渡ったのでした。この風は次の年へと吹き渡っていくことでしょう。

工藤宏 (SMF運営委員)

## 東野高等学校建築ツアー

SMFの西埼玉の拠点のひとつ、益進学園東野高等学校。昨年度は、校内の魅力的な風景の中に〈創作ダンス〉と〈天田楽〉による異空間を創出。今回は文化資源として価値の高い建築そのものを取り上げ、校内10箇所の建築物を巡るツアーを実施しました。建築家クリストファー・アレグザンダー(1936-)の「パターン・ランゲージ」理論を実践した日本で唯一の例というだけに遠来の建築関係者も多く、定員を超える29名が参加、案内役は(株)文化財保存計画協会主任研究員の津村泰範さん。

この学園が竣工した1985年は、日本の建築界でもさまざまな取り組みがなされ、ポスト・モダン時代と言われていること。理論に共鳴した学園理事の依頼を受けたアレグザンダーは、教職員や生徒に望ましい学園のさまざまなイメージ(パターン)を提出させ、それを掏い紡いでプランを作ったこと。こうして生まれたかたちは結果的に「擬和風」となった、という津村氏の分析に納得。学園の不思議な雰囲気は、個人的な設計者一人が産み出したものではなかったのです。発注者・設計者・施工業者のそれぞれの立場を配慮して慎重に言葉を選ばれた解説でしたが、それでも数々の葛藤があったことを察しました。当時、雨の日にカッパを着た関係者たちが、この広大な敷地に旗ざおを立てながら夢を語り合った様子を想像しました。

門を抜けて講堂、池にかかる太鼓橋、食堂、体育館、教室棟、多目的ホール、図書室、武道館と駆け足のツアーでしたが、普段入れない各施設を解説付で納得しながら見るというたいへん貴重な機会となりました。

山尾聖子 (SMF運営委員)



ト緑日)では、そのシステムを拝借して千鳥格子を嵌め込んだFMミニ放送局の舞台を造り、またそのまわりでは子どもたちに千鳥格子を組んでつなげてもらうワークショップをおこないました。

今年度の〈SMFアート楽座〉でも、この「假具」を活用しようと考えていたところ、京都で同じような仕組みを考えている建築家に出会いました。桂離宮の昭和の大修理に携わられた安井清さんです。茶室のことを「囲い」とも呼ぶのは、足利時代、貴族住宅で定法だった三間四方十八帖の室を四分して屏風で囲み、茶道を楽しんだことにより。その広さは鴨長明が隠遁生活を送った方丈の庵と同じです。それを現代に甦らせ、豊かな生活の背景にしようとした試みが安井さんの「方丈庵」です。

「假具」は組み立てて取り外す構成の面



数寄屋」「臨機応楽」「科学・技術・藝術」などについて、おおいに語ってくださいました。

如庵、待庵、桂離宮と数多くの上級の建物の移築や修理にかかわることができた安井さんは運の良い建築家でした。「方丈庵」を通していろいろと教えていただいたことは、その幸運のお裾分けでした。だから、完成した「方丈庵」もまた幸運な「自在の間」であつたらうと思います。

※この催しからひと月後の10月30日、安井清さんは他界されました。享年84歳。ご冥福をお祈りします。

三浦清史 (SMF運営委員)

昨年度の〈SMFアート緑日〉で北浦和公